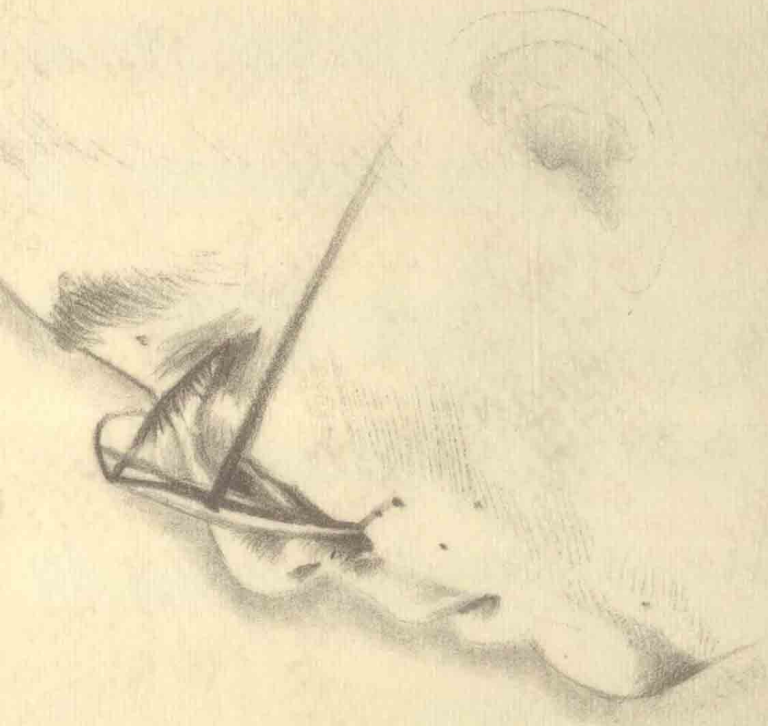
静かな生活

大江健三郎



静かな生活

大江健三郎

講談社

静かな生活

一九九〇年一〇月二五日　第一刷発行
一九九〇年一二月二〇日　第二刷発行

著者――大江健三郎

© Kenzaburô Ôe 1990, Printed in Japan

発行者――野間佐和子
発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二　電話東京〇三―九四五―一一一（大代表）
印刷所――株式会社精興社　製本所――株式会社黒岩大光堂
定価――一三〇〇円（本体一二六二円）

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

IBN4-06-205079-X（文1）

目次

静かな生活　5
この惑星の棄て子　35
案内人（ストーカー）　87
自動人形の悪夢　111
小説の悲しみ　161
家としての日記　207

裝幀　司修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

静かな生活

静かな生活

父がカリフォルニアの大学に居住作家（ライター・イン・レジデンス）として招かれ、事情があって母も同行することになった年のこと。出発が近づいて、家の食卓を囲んでではあるが、いつもよりあらたまった雰囲気の夕食をした。こういう時にも、家族に関するかぎり大切なことは冗談と綯いあわせてしてしか話せない父は、さきごろ成人となった私の結婚計画について、陽気な話題のようにあつかおうとした。私の方は、自分のことが話合いの中心でも、子供の時からの性格があり、このところの習慣もあって、周りの発言に耳をかたむけているだけだ。それでも麦酒で一杯機嫌の父はメゲないで、

――ともかくも、最低の条件は提示してみてくれ、といった。

もっとも、はじめから愛想のない返事を予期して、父はなかば閉口したような笑顔で見つめてくるのだ。つい私は時どき頭に浮かぶことをいってみる気になった。自分の声が妙なふうにキッパリ響くのを気にかけはしたけれど……

――私がお嫁に行くならね、イーヨーといっしょだから、すくなくとも2DKのアパートを手に入れられる人のところね。そこで静かな生活がしたい。

口をつぐんですぐ、父と母とがそれぞれショックを受けたのがわかった。まずはふたりとも私のいったことを、子供じみた滑稽な思い込みだとして、笑いにまぎらわせるふうだった。そうした展開が、家族の会話の進み行きとして父の得意な方向でもあるわけなのだ。イーヨーと呼ばれている兄は私より四歳年長だが、知能に障害のある人たちの通う福祉作業所の工員として働いている。新妻と一緒にそういう人物が越して来るとすれば、若い夫はどのように迎えることだろう？　結婚式までにあらかじめそうしたことを話しておいても、なにか要領をえぬ不思議なこととして聞き流すのではないか？　そのあげくの新生活の第一日目、やっと手に入れた2DKに大男の義兄があらわれては、未経験な若者はどんなにびっくりすることだろう？

しかし私は両親の冗談めかした話しぶりの底に、なにか真面目な意図があるのを感じ緊張して、顔をじっと伏せていた。常識はずれのようでも、いったんいってしまえば私には大切なことなのだし。そのうちただ黙ったままでいることもできなくなって、

――ユーモアがわからない人だとずっといわれているし、そのとおりだから、とつづけたのだ。パパたちが隠れた意味をつたえてくれているのかも知れないけれど……　ともかく私としては、こう考えていったのね。私がお嫁に行くならといっても、もちろん具体的なアテがあってじゃないのよ。仮定のこととしていろんなケースを考えてゆくと、どんな仕方で始めてもデッド・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

エンドにぶつかってしまうから、そのうちこんなふうに考えることになったのね。

いまの話も、私の思い込みが滑稽だとは教えてくれるけれども、……私自身、イーヨーとふたり受け入れてくれる人はいないと思うわ。……しかしデッド・エンドの実際的な乗り越え方を、パパとママが教えてはくれないでしょう？

私が話したのは、これだけのことだった。しかも、それでは不十分だとよくわかっていたのだ。母が寝室で化粧をしている間、小さい時からの習慣で、私はつきそうように脇に立っていくらか話をすることがある。その仕方で翌朝、話の続きをした。弟のオーちゃんの口癖をかりれば、一応、準備してもおいたのだった。むしろ無意識も加わって私にそれを準備させたというほうが正確だけれど……

昨日の私の話には、自分自身失望した。なにもいわないよりもっとよくなかったと思う。それで寝室に引揚げてからも眠りにつけないままいろいろ考えているうちに、一方では神経が疲れているのでもあり、寂しくガランドウの場所に、ひとりで立っているという恐しい夢がはじまりそうになった。それというのも、まだ眼ざめている現実の意識が残って、そこにいりまじっている感じ。その悲しいような、はるかなような気分のなかで私は立ちすくんでいたのだ——自分の躰がベッドに横たわっているのもよくわかっていたが。

そのうち、夢の方へ入り込んでいる自分の斜めうしろに、もうひとり私と同じ気分の人が立っているのがわかった。ふりかえって見ないでも、それが「未来のイーヨー」なのだと私は知って

いた。すぐにも斜めうしろから踏み出して来るはずの「未来のイーヨー」は花嫁の介添え人で、それならば自分は花嫁なのだ。しっかり花嫁衣裳を着た私が、花婿の心あたりはないまま「未来のイーヨー」を介添え人に寂しくガランドウの場所に立っている。そこはもう日暮れ方の、広大な野原。そのような夢を見た……

夜が更けてから眼をさまし思い出すうち、私はなによりも色濃く、夢の寂しい気持をブリかえらせてしまい、暗いなかのベッドに横になっていることができなくなった。私は階段を上って行き、兄がトイレに通う際つまずかぬよう常夜燈をつけて狭く開けてあるドアから、寝室に入って行ったのだ。子供の頃いつもそうしていたように、なんとなく抱えていた使い古しの毛布で膝を覆うと、イーヨーのベッドの裾の床に坐り込み、人間の肺の規模を越しているような音の寝息を聞いていた。小一時間もしてから兄は薄暗がりのなかでベッドから降りると、さっさとすぐ向いのトイレに出て行った。兄にまったく無視されたことで、私はあらためてもっと孤りぼっちの気持になっていた。

ところが大きい音をたててていつまでも排尿するようだったイーヨーは、そのうち戻って来ると、大きい犬が頭や鼻さきで飼主を小突いて確かめるように、躰をかがめてこちらの肩のあたりを額で押しつけ、私の脇にやはり膝を立てて坐り、そのまま眠るつもりのようだった。私は一度に幸福な気持になっていた。しばらくたつと、兄は分別ざかりの大人がおかしさを耐えているようなしゃべり方で、しかし声だけは澄んだ柔らかさの子供の声で、――マーちゃんは、どうした

のでしょう？　といった。私はすっかり元気をとり戻して、イーヨーをベッドに寝かせつけると自分の部屋に帰ったのだ。

秋学期から向こうでの日程が始まるため、もう明日が父と母の出発という夏の終りの日だった。いっぱいに詰めた重そうなトランクを脇にして、長椅子で新聞を読んでいた父が、台所で働いていた母にとも私にともなく、むしろ考えあぐねての独りごとのようにこういった。

――イーヨーに、スポーツを再開させなければな！　水泳がいいかも知れないな！

父の脇で床の敷物にじかに腹ばいになって、いつもの作曲をしているというようであれば、兄は一拍置くように考えて、

――スポーツですか、水泳ならば得意ですけど！　と家族みなの笑いを誘う種類の受けこたえをしたはず。

そして父の言葉が棒かなにかのように私のなかにゴロンと居残る、ということはなかったと思う。兄は家族の間でのそうした緩衝材の役割を――かならずしも無自覚にではなく――ユーモラスに果たしているのだ。

ところが、父がスポーツということを唐突に口に出した時、イーヨーは傍にいなかった。朝のうちに私が兄を福祉作業所に送って行って、朝食の後かたづけを手つだっているところへ、遅く起きて来た父が朝刊を読んで、ということだったと思う。私はさきに書いたように、ゴロンと異物をとどこおらせたままでいた。そして父が書斎へ上って行ってすぐ居間を掃除しようとして、

開かれたままの朝刊に、知恵遅れの青年が林間学校の女生徒を襲った、性的な動機の――とみなされている――傷害事件の記事を見たのだった。

そこで私のなかに湧いた、なにくそ、なにくそ！　という攻撃的な気持ちは、即席にかもし出されたものというよりも、ずっと準備されていたように感じる。現に私はこのところたびたび、なにくそ、なにくそ！　とイーヨーが乱暴なセリフとたしなめる言葉を使って来たのだから。この日の朝刊の記事にもあったものだが、精神障害者の性的な「暴発」という言葉がよく眼につくようになり、新聞社が意図を隠したキャンペーンでも行なっているのかと、私は母に家の新聞をとりかえてみないかと相談したことさえあったのだ。ところが、いま父が当の新聞の知恵遅れ青年の性的「暴発」キャンペーンに――それが実際やられているものとして――素直に反応し、兄のスポーツの必要というようなことを、もともとの記事にはふれずいいだしたことに私は反撥し、なによりもうっとうしく感じたのだ。

イーヨーは確かに性的に成熟した年齢にあるにはちがいない。イーヨーと同じく二十代はじめの健常な男たちを、通学の行きかえりに、また大学のキャンパスで私自身いくらでも見てきた。そしてかれらのすべてからとはいわないが、とくにヴォランティア活動の仲間にはそういう感じをまったく持たないけれど、性的なものと奥深くで結んでいる感じのギラギラしたものが放射されて来ることはある。その種の週刊誌記事は電車の中吊り広告にあふれている。

しかしこうした一般的な先入見から、父が新聞記者と同じ感じ方でイーヨーの「暴発」を心配

し、その対策として（!?）スポーツの必要をいうとすれば、父には事実をよく見ていないことから来る「通俗的」なところがあるのではないか？　そこに私は反撥を感じたのだと思う。

福祉作業所でも、実際に幾度か「暴発」に近い事例が話に出ることはあった。しかしそれらはお迎えのお母さんたちのかたまりに加わって私が傍聴したかぎり、健常な若者たちのギラギラにくらべればずいぶんひかえめな、むしろ憐れなような「暴発」なのだ。席の隅の方でおとなしく聞いている私の胸のうちで、こんな言葉が湧いているとは誰も思わないはずの、なにくそ、なにくそ！　という声が高鳴るほどの……　もとより警察ざたになりそうなことが起こっているのではなかった。

イーヨーが通いはじめた頃、私はただ送り迎えの母について行くだけだったが、記憶にあるかぎり福祉作業所の周りは空地だった。ところがいまやニョキニョキときれいなファサードの木造アパートが建ち並んで、曲り角の見通しがきかず、危険なほどだ。もし事件にでもなれば、新しい住民の福祉作業所反対の運動すら始まっているだろう。

この春のはじめの風の強い日、兄を送った帰り交通量が異様に激しい甲州街道から中古自動車売場のフェンスぞいに入る脇道へさしかかった。福祉作業所では当日の欠席届けと出席者の顔ぶれが照合されたところで、その子は兄の作業所仲間ではないはずだが、やはり知恵遅れらしい男の子が、真白できれいなお尻から膝のうしろまで剝き出しにして、フェンスの向こうの汚れた自動車を見つめながら性器にさわっている。連れ立っていたお母さんたちのリーダー格で、いつも

決断力のある言動をされるAさんが、――アレ、アレ！　と声をあげてから、マーちゃんはここにいなさい、Mさんと私が先行するから！　と不思議な言葉の使い方で私を制して、その子のところに近寄って行かれた。

たまたま車道をはさんだ反対側を三人連れの女の人たちが通りかかって、男の子のふるまいを見咎める動きをおこしかけたところでもあった。Aさんは男の子にズボンをあげさせ、脇の地面にじかに置いてあった肩かけ鞄をかけなおさせるなどされた。そしてその子の通っている学校の方向を確かめてから、送り出す手順をテキパキ進められたので、立ちどまっていた三人連れも文句をいいだす余裕はなく、ただ示威的にこちらを振りかえりながら立ち去って行ったのだった。

あらためて追いついた私と駅に向かいながら、Aさんがいわれたこと。――見物する近所の奥様方がいられなかったらば、そして私たちの作業所の子供とまちがえられる心配がなかったならば、あのまま心いくまでさせてやったのにねえ！

今度はMさんが、やはり私への配慮から、――アレ、アレ！　といわれたが、むしろ私はAさんに賛成で、その意味でのなにくそ、なにくそ！　を胸のなかでいっていたのだ。自分が赤面し涙ぐみそうにさえなることが、なにか品の悪いことに思えて、癪で……

つまり私にはあの男の子のことを批判する気持はないけれど、イーヨーが同じ種類のふるまいに出ることは、すくなくとも家族が見ているところではなかった。また私たちの知らないところでも、そうしたことはこれまでなかったし、今後ともないのではないか、というのが私の感じて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com